

お姉ちゃん

長田 瑞恵

自己主張

わが家の娘は三歳一か月になりました。最近の娘はいろいろなことを自分一人でやりますがります。そういう時の娘は、「S(娘の名前)は三歳になったから、お姉ちゃんだから、〇〇ができるようになったんだねー。二歳のころは、ちっちゃかったからでしかなかったんだねー」などと得意気です。しか

しその一方で、自分でできることでも「やって」と親の助けを求めることもあります。この微妙なバランスを計るのが私には難しく、時には娘の意に反して手を貸してしまったり、反対に助けてやらないでいたりするために、娘が怒り出すことがあります。ある朝、娘はデザートに用意していた個包装のヨーグルトを私に差し出し、「あけて」と言いました。私は、何も考えずに紙のふたを全部はがし、

ヨーグルトを娘に返しました。その瞬間、娘が絶叫しました。

「Sがあけたかったー!!」

私はあぜんとして、「だって、あけてって言ったじゃない?」と聞き返しました。すると、「少しだけあけてほしかったのー! あとはSがあけるんだったのー!!」と大泣きしています。その後はいくら私が謝っても、なだめても、言い聞かせても、娘は聞き入れようとしません。とうとう見かねた父親が、もう一度ヨーグルトのふたを容器に貼り付けて娘に渡してくれました。ようやく泣き止んだ娘は満足そうにふたをはがし、ヨーグルトを食べ始めました。

このように親が手を貸す加減も難しいのですが、ほかにも娘には譲れないことがたくさんあるようです。時にそれが大騒ぎに発展してしまうこともあります。

娘は視力の矯正のために、午前中は左目、午後は右目に、貼るタイプの眼帯をするのが習慣になっています。ところが、ある日、夕方に保育園に迎えに行くと、娘が眼帯をしていません。「貼り忘れたのかしら? もうはがしてしまつたのかしら?」などと思いつながら、さして気にもとめずに帰りました。を終え、娘と息子を車に乗せて帰路につきましました。家までの道のりを半分ほど過ぎた時です。

「メンメ(目)、貼ってないー!!」

突然、娘が後部座席で絶叫し、号泣し始めました。あまりの娘のけんまくに、一瞬、何のことだか全くわかりませんでした。呼び続ける娘の言い分を聞いているうちに、どうやら、午後には貼るべき眼帯のことを言っているらしいということが理解できました。

「貼るの、忘れちゃったんだね。それじゃ、おうち帰ってから貼ろうか」と提案すると、娘はさらに激

しく泣きながら、「おうちでは、はがすのー！」と言います。どうやら、右目に眼帯を貼るのは保育園でなければならず、家はそれをはがす場所なので、家に帰ってから貼るのでは遅いということのようです。そして、娘はとんでもない主張を始めました。

「保育園に戻って貼るー！」

もうあとほんの少してわが家、というところなのです。私は困惑して必死に娘の説得を試みました。

「もうすぐおうちなんだよ。おうちで貼ったらいいじゃない。おうちに帰ろうよ。帰ってから貼ろうよ」

しかし、娘の絶叫と号泣は止まないどころか、ますます激しさを増していきます。私はとうとう根負けして保育園へと引き返しました。「あと少しで家だったのに。家で貼っても同じじゃない……」大泣きする娘の声を聞きながら、私も泣きたいようだな、しかし、半ばあきらめたような複雑な気持ちになりました。驚いて出迎えてくれた保育園の先生に

眼帯を貼ってもらって、ようやく涙が止まった娘を見つめながら、改めてこの時期の子どもの手ごわさをかみしめたのでした。

自己主張の力は、三歳から四歳ころにかけて急激に伸びていくといわれます。その一方で、自分の欲求や行動を必要に応じて抑制する力は、どちらかといえば、ゆっくりと発達していくと考えられています^{注1}。最近の娘の姿は、まさに自己主張と自己抑制のギャップに振り回される毎日ですが、まずは、私を困り果てさせるほどに自己主張できるようになったことを受け入れ、いずれ状況に応じて行動を調整する力も伸びてくるのを待ちたいと思います。

親としての育ち

毎日毎日、目覚ましい発達を遂げていく娘と過ごしていると、自分がこれまでもっていた三歳児のイ

メージと、目の前の娘の姿とが微妙にずれているように不思議な感じがします。

私は研究者としては三歳以降の子どもが専門ですので、ようやく娘が私の守備範囲に入ってきたというところですよ。しかし、研究者として子どもたちをみつめていた以前の私には、生活を共にすること、親子関係の中で時間を共有するということの重みは、想像もつかないことでした。それが、娘や息子が誕生し、有機的な関係や文脈の中で子どもたちの一つひとつの行動や言葉の意味をとらえ直す時、これまで見えなかったことに光が当てられ、感覚的に納得できなかつたことが、実感として身にしみるようになってきました。

たとえば、反抗期についても、自分が母親になることでずいぶん認識が変わってきました。自我の発達という観点から見れば、反抗期は子どものさまざまな能力の発達の証であり、「自分でやろう」とい

う気持ちの芽生えとして喜ぶべきものだといえます。しかし、ある研究^{註2}によれば、母親の半数が反抗は必要なものだと考えている反面、つい感情的に対応が難しいと考えているそうです。以前の私は、主に子どもの立場にたつて反抗期を解釈していたために、この研究で明らかにされた母親たちの気持ちに少々ひっかかるものを感じていました。ところが、いざ娘が反抗期を迎え、こたわりが強くなり、ますます論理的に自己主張するようになってくると、娘の成長がうれしい反面、一つひとつの場面では対応に苦慮することもしばしばです。まさに、先程の研究の中の母親たちと同じ気持ちなのです。このように自分が当事者になって初めて、喜びも苦悩もすべて含めて「こういうことだったのか……」と実感することばかりです。

人間は、子どもが産まれれば自動的に「親らしく」なるわけではなく、子どもと親とが互いに影響

し合いながら、親も親としての行動を徐々に学んでいくといわれます。私もまた、娘からの影響を受けながら、実感を伴った経験を通して母親らしくなっていくのだと思います。

名推理

もちろん、娘との生活は娘に振り回されることばかりではなく、穏やかで楽しい時間もあふれています。娘の言葉にはっとしたり、ほほえましく思ったりすることもたくさんあります。

娘が三歳近くになったある日のことです。保育園では「お姉ちゃん」として小さい子どもたちの相手を任せられることが増えたためでしょう。家にいる時も弟の相手だけでなく、父母に対しても何かと世話を焼こうとするようになってきました。この日も、三輪車に乗って父親と遊んでいた娘は、「三輪車は楽しいから、お父さんにも貸してあげよう」とで

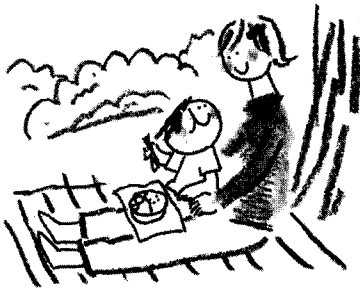
も思ったのか、父親に三輪車に乗るようにしきりと勧め始めました。

そこで父親が「お父さんは大きいから乗れないよ」と言う、「ちっちゃくなったら乗れるよ」と言います。父親がおもしろがって、「どうやったらちっちゃくなるの?」と尋ねると、「ご飯、少ししか食べなかつたら、ちっちゃくなるよ」と答えるのです。

確かに、いつも食事の時に言われているように、「たくさん食べたら大きくなる」のであれば、「少ししか食べなければ小さくなる」と考えても不思議はありません。人間は、未知の事柄についても、すでにもっている知識を最大限に活用して推論すると言われています。娘なりの推理に脱帽したやりとりでした。

幸せな時間

息子が生まれてからもできるだけ娘との時間を大



切にしたいと思いつつも、娘と二人きりの時間はなかなかとりにくくなってしまう。そこで、先日、思い切って、息子を保育園にお願いした後で、娘と二人だけで昼食を持って公園に遊びに行くことにしました。弟がいる時には母親の私にべったりと甘えることの少なくなっていた娘ですが、この日ははしゃぎながら私にまとわりつくように遊んでいました。「お母さんのおひぎで食べるの」と言いながら私のひぎにちよこんと座り、うれしそうに昼食を

ほお張る娘を見てみると、何とも言えない温かな気持ちになりました。
私は娘にできるだけ「お姉ちゃんदेशよ」という説得の仕方はしないように

心掛けていますが、時折、娘自身が「Sはもうお姉ちゃんだもんねー」と言うことがあります。しかし、娘は三歳になったばかり。まだまだ、たつぷりと母親に甘えたい年ごろなのです。

私もまた、甘えてくる娘と穏やかな時間を過ごすことで、娘に寄り添う気持ち、受け入れる余裕を取り戻します。忙しさのあまりにいろいろなものを見失ってしまわないように、娘と共に生きる幸せな時間を大切にしながら過ごしていきたいと思うこのころです。

(十文字学園女子大学准教授)

注

1 柏木恵子「幼児期における「自己」の発達」東京大学出版会 一九八八年

2 氏家達夫の調査結果(一九九六年)より。「乳幼児心理学」(三宅和夫・内田伸子(編) 日本放送出版協会 一九九七年)に掲載。